

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

園名	明日葉保育園 大山園
日時	1月～3月

1. 活動テーマ

<テーマ>

身近な音に触れて合奏を楽しむ

<テーマ設定理由>

自由遊びやリトミックの時間に楽器に触れたり、歌を楽しんだりする姿があった。音への興味が見られることから、さらに楽器に触れたり生活の中にあふれる音に触れたりしてほしいという思いがあった。

2. 活動スケジュール

- 音を探す（園内、園外にある音）
- 音作り（園内外の音に似せて作る。作ったものに似た音を見つける。）
- 様々な楽器の使い方を知り、楽器を奏でる楽しさを知る。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

【素材や道具】

- 楽器作りに必要な廃材、小豆など音を出すために必要な身近な素材

【環境の設定】

- 音を探しに行く機会を作る。
- 音作りに必要な材料を用意し、子どもたちが自分で選び取れるようにする。
- 新しい楽器を用意したり、作った楽器を使って演奏したりする場を設ける。

4. 探究活動の実践

<活動内容>

- 紙皿やラップの芯、紙コップなど身近な素材を使って太鼓やマラカス、笛などの楽器を作った。
- 作った楽器を持ち寄ってクリスマス会に参加した。「ジングルベル」の歌に合わせて好きなリズムで楽器を鳴らして音遊びを楽しんだ。
- 1歳児クラスの保育室に置いた「ミュージックパッド」を踏んで音の違いや感触を楽しみながら遊んだ。
- 音遊びが継続し、生活発表会ではタンバリンや鈴、木琴などを使った合奏を披露した。

<活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関り>

- 楽器作りでは「こういう音の楽器を作りたい」「もっと音を低くしたい」など子どもたち自身が音に関するこだわりを持って、納得できるまで楽器を作りこんでいた。
- 作った楽器を持ち寄ったクリスマス会では、乳児幼児問わずいろいろな音を鳴らして楽しんでいた。



- ミュージックパッドは音の違いや色の違いを楽しみながら遊んでいた。配慮が必要な子の刺激にもなっているようで、「踏むと音が鳴る」という仕組みに興味を持っているようだった。

- 年長児は生活発表会に前後で継続的に音遊びを楽しんでいた。季節の歌を木琴で演奏したり、習い事でピアノ教室に通っている子は、習った曲を木琴でも演奏してみたりしていた。ピアノが得意な職員に「どの音でやるの?」と聞いて楽譜を書いてもらっていた。「あの曲がやりたい!」と意欲的に取り組んでおり、スムーズに演奏できると「上手になったから聞いて!」と保育者にアピールし、子どもの自信に繋がっていた。



- 生活発表会では、日常的に音楽や楽器に親しんでいる子どもたちの姿を伝えることをねらいとして合奏や合唱を演目に入れた。楽器の正しい演奏の仕方を知ったり、奏法を変えると音も変わること気づいたりする姿が見られた。遊びながら思わず曲のメロディーを口ずさむほど音楽に親しみを持っていたようだった。

- 生活発表会後も音や音楽に親しみをもち続ける子がいた。玩具のマイクを使って友だちと一緒に歌を歌ってみたり、いろいろな楽器が登場する絵本を読んだりしていた。身近な素材だけでなく、ブロックを使ってオリジナルの楽器を作り、その子が鳴らした音に反応した子が「どうやって作ったの?」と問いかける場面もあった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

- 長期的に楽器を使った活動に取り組んだことにより、子どもたちの興味関心が行事を終えても持続しているように感じた。また、年長児は音階のある楽器を演奏したことで、難しさを感じながらも練習を頑張ったことや、本番を乗り切ったことへの達成感から、子の自信へと繋がっているように感じた。
- 絵本と音、製作と音など一見繋がらないように思うことでも、子どもたちの気づきや興味からどんどん繋がっていくこともあると気づかされた。
- 乳児、幼児関係なく興味を持てるテーマだったからこそ、クリスマス会や発表会などの園内行事と絡めて進めていくことができたように感じた。
- ミュージックパッドは今後もさまざまなクラスで使用が可能だと見込まれる。持ち運びが可能という点を生かして、手軽に音に触れられる道具として今後も活用していきたい。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

園名	明日葉保育園 大山園
日時	1月～3月

1. 活動テーマ

<テーマ>

食への興味、関心を高める

<テーマ設定理由>

保育目標である「心も体も健やかな子ども」の実践に向け、食べるだけにとどまらず、食育の重要性を感じ、子ども達の興味・関心から探究心を育みたいと思った

2. 活動スケジュール

- ①給食職員と連携して、発信内容を考える
- ②食育への展開
A:絵本に出てくるおにぎりを投票にて決め実食する
B:野菜を使った色の変化を楽しむ(色が変わるゼリー)
- ③実食
- ④振り返り

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- A:絵本・投票用ポスター・提供時に使用する屋台作成等
B:紫キャベツ・透明なベ・卓上コンロ等

4. 探究活動の実践

<活動内容>

- A
絵本に出てくる様々なおにぎりの種類から「おにぎり総選挙」として投票ポスターを作成、掲示。保護者と一緒に自分が食べたいものを選んで投票する。票数が多かったものを午後おやつとして提供する。当日は屋台に並べ、雰囲気を楽しむ
- B
子ども達の前で紫キャベツを煮出し色の変化を学び、ゼリーとして提供する。食べる直前にレモン汁をかけ、さらに色が変化する様子を楽しむ。

<活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関り>

・「おにぎり総選挙」では、絵本を借りて帰って家でも読んだり、午後おやつで提供される日を心待ちにしたりしていた。子どもたち同士で「何に投票した？」や「今一番多いのはこれだよ」などと話をする場面もあった。

・絵本に登場したおにぎりは、園でのおやつだけでなく、遠足の弁当や家での夜ご飯などになっていることもあった。連絡帳にも「絵本に出てきたおにぎりを家でも作ってみました」と書かれていたことがあり、親子の会話のきっかけにもなっているようだった。



・紫キャベツを使ったゼリーづくりは、色の変化だけでなく水が沸騰する様子や熱によってゆらゆら揺れているように見える様子など、様々なことに気づく子どもが多かった。どうして色が変化するのかという説明をしっかりと聞いており、活動後に保育者とクイズを出し合って復習する子どももいた。

・レモン汁をかけてさらに色が変化すると「本当に色が変わった！」と驚いていた。レモン汁のかかり具合によって色の変化に差が出るため、色が部分的に違うことに気づいた子は不思議そうに観察したり、友だち同士で見せ合ったりしていた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

・透明な鍋を使ったことによって、色の変化や温度の変化に気づきやすい環境を作ることができた。趣旨に添った事以外の気づきもあり、実際の調理過程を見る経験の大切さに改めて気づかされた。また、IHではなく、コンロを使ったことで火や熱の動きがよりダイレクトに伝わっていたため、使う道具1つ1つの選定も重要になってくると気づいた。

・おにぎり総選挙は家庭も園も巻き込んだ活動となり、保護者の方も子どもとのやりとりのきっかけになったり、好き嫌いにアプローチする手だての1つとなったりしたようだった。給食職員との連携が難しい部分もあったが、給食の視点と保育の視点が交わる新たな機会となった。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

園名	明日葉保育園 大山園
日時	1月～3月

1. 活動テーマ

<テーマ>

本を楽しむ

<テーマ設定理由>

子どもの興味、関心あるものを絵本や図鑑を通してさらに探究心を深めてほしいと思った。

2. 活動スケジュール

- ① 日常の遊びを通して、子どもの興味関心が何なのかよく観察する
- ② どんなものを調べてみたいかなど子ども達と話し合う時間を設ける
- ③ 絵本コーナーを設置。
- ④ 振り返り

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

絵本コーナーの設置。新しい図鑑や絵本を各クラスの本棚に置いた。

4. 探究活動の実践

<活動内容>

興味関心のあることを自ら調べたりして学びを深める

<活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関り>

・動物や恐竜などの生き物に興味がある子は、図鑑を広げてどんな種類がいるのか、どんな色をしているのかに興味を持って調べていた。ひらがな、カタカナが読める子は自分で、難しい子は「これどうやって読むの?」と保育者に聞きながら見ている。



・絵本コーナーの緑の部分は憩いの場にもなっていて、友だちと一緒に寝転がってみたり足を伸ばしながら座ってくつろいだりしている。

・多くの絵本が置けるようになったことで、絵本を見る子が増えた。ストーリー性のある本だけでなく、図鑑や「ミック」などの探索絵本が増えたのも要因として大きい。

・「ミック」を楽しんでいる子と保育者の様子に惹かれてやってきた子が、「一緒にやりたい」「いいよ、今〇〇探してる」というようなやりとりを経て、一緒に楽しむようになるというような異年齢児との関わりにも繋がっている。

・廃材を使った制作が得意な子は科学に関する図鑑を見て、ソーラーパネルのような装置を身近な材料で作ってみたいと話していた。作り方も載っていて、それを参考にして作っているようだった。

5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

・絵本を介して友だちとのやり取りが増えたり、自分の興味があるものについての知識を自分で得ようとしたりする姿が増えた。「ミック」を通して物の名前を新たに知る子もいて、絵本を通じた物との出会いもあることに改めて気づいた。

・絵本コーナーが1段小上がりになっていることで、机上スペースとの間に少し空間の区切りができてきているのか、普段落ち着かない様子の子もマットに行くことと落ち着くことがある。今後も憩いの場として子どもたちが自由にくつろげるようにしていきたい。